

浄土

4
1994

巻頭エッセイ

土屋正道

旅

夏 攸吾

好評連載

吉川英明 利根川 裕 稲葉小太郎

連載講話

高橋富雄

法然上人のご生涯に学ぶ

胎内教育・家庭教育

藤堂俊章



法然上人鑽仰会発行

は
じ
め
に
押
し
て
ね、
0
0
8
8。



ゼロゼロ押したら ハッピーハッピー

0088

日本を楽しくする電話

お申し込み・お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

0088-82 (無料) / 0120-0088-82 (無料)

受付時間 9:00~23:00 (年中無休)

0088なら●月々の基本料金は一切かかりません。こ使用になった通話料金
だけのお支払いです。●かけ方は簡単。現在お使いの電話機で、市外局番
の前に“0088”を押すだけ。●60kmを超える市外電話は0088がおトク。

筑波・銚子を訪ねて

写真 夏攸吾

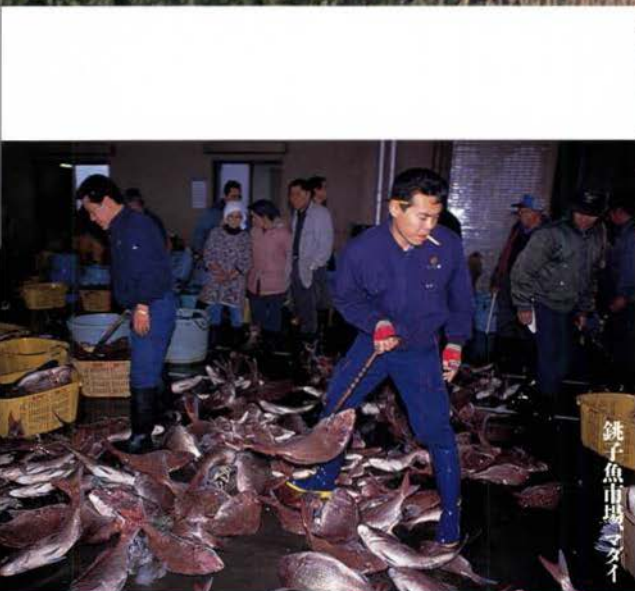


筑波山ロープウェイ





犬吠崎の海



銚子魚市場、キンメダイ
銚子魚市場、マダイ





イワシの水揚げに群れ集まるカモメ

浄土

1994/4月号



目次

〔カラー口絵〕筑波・銚子を訪ねて……写真＝夏 攸吾	3
東海道念仏行脚——大本山増上寺から 総本山知恩院まで——土屋正道	8
筑波そして銚子へ……夏 修吾	18
午後の日差しの中で——④ 気遣い……吉川英明	26
テレビキャスターのアンクル——⑧ キャスターを辞めるの弁……利根川 裕	34
現代の快僧——その3 がん患者とともに——浄土真宗 小泉敬信さん・稲葉小太郎 茲恩寺住職	40
念仏信仰と武士道(二)……高橋富雄	52
胎内教育・家庭教育——法然上人の ご生涯に学ぶ——藤堂俊章	64
編集後記……	74

表紙題字＝浄土門主 中村康隆 貌下

表紙撮影＝落合泰三

目次・編集後記イラストレーション＝田村直巳



大本山増上寺境内から第一歩が格闘した。

東海道念仏行脚

大本山増上寺から総本山知恩院まで

浄土宗東京教区青年会 観智院

土屋正道

「土屋さんは行きますよね？」その大それた計画を初めて耳にしたのは、昨年の一月初め。友人の元氣マン清水道隆さんの発願が実を結ぶとは、正直思ってもみませんでした。しかし如来さまの御加護を頂き、有志一行は昨年の十二月十三日に増上寺を出発、十二月二十五日まで十二泊十三日にて国道一号线に沿って歩き、念仏をしてまいりました。お蔭さまでお寺に寄宿させて頂き、大過なく知恩院までたどりつくことができました。

「エーッ！ 歩いて行っただけですか？」「なんのために？ 修行の一つですか？」「御苦労なこと、暇があつていいね」など皆さんから反響を頂きました。「……智者のふるまひをせずしてただ一向に念仏すべし……法然上人」の言葉も、現代に生きる小賢しい私たちにはなかなか実践ができません。『青年僧たちの愚直な体験記』とお読み頂ければ幸いです。

装備はハイテク靴下

「冒険とは帰ってくることにある。」植村直巳さんの言葉でしたでしょうか。私たちの冒険、念仏行脚は期間も決まっており、失敗が許されませんでした。一日四十〜五十kmで十三日間、誰もが初めての経験です。できる限りの装備・準備をいたしました。まったくおなじ靴を2足(雨の翌日のための予備)、足首を守るトレッキングシューズ1足(箱根、鈴鹿、比叡山越えのため)、ランニング用のハイテク靴下6足(カカトやつま先の厚さが3倍、汗をかいたら取り替える)、上下セパレート雨具(通気性・防水性がよい)、ウインドブレーカー上下(防寒具)、光るテープ(夜間の安全用具)、寝袋、サポーター、カイロ、そのほか無線機3台、携帯電話3台、救急箱、食料などなど。今となってはちよつと大げさかと笑えますが、覚悟を決めるためにも充分な装

備が必要だったのです。とにかく到達するために服装は自由となりました。皇居の回りをまわったり、箱根・比叡山ハイクをするなど、体力アップと心構えを整えていきます。仕事の整理をして、最後に遺言を書いた人もおりました。さあ、準備完了です。

初日 平成五年十二月十三日(月)晴
増上寺→大船 43キロメートル

依所 神奈川教区 西念寺

●藤堂恭俊法王台下の激励を頂戴し、いよいよ出発です。

守護神“サポートカー”

今回の念仏行脚では、行程中ずっとサポートカーがついてくれました。二〜三kmごとに止まっていて、私たちが通り過ぎるまで見守ってくれます。どんなにか心強かったことでしょう。無線で始終交信をして、道筋や歩く速度を教え

黒衣・網代笠・手巾・脚半の姿から着替えて、
いよいよ箱根越え。

キロメートル

依所 神奈川教区 道場院

●あいにくの雨です。故障者が続出し、到着が
二時間以上遅れる人も。

半径三十cmの世界

東京から京都まで参りましたが、実は景色を
よく覚えておりません。ずっと網代笠を目深に
被っておりましてので、上半分の視界は妨げら



てくれたり、食料や薬の
調達、雨具や防寒具の出
し入れなど本当にお世話
になりました。足を痛め
た方も最後まで旅を続け
られたのも守護神のお蔭
です。

二日目 十四日（火）雨
大船→小田原 37・1

三日目 十五日（水）小雪のち晴
小田原→三島 43キロメートル

依所 静岡教区 願成寺

●三枚橋より箱根越え。『羊腸の小径』旧道は
滑りやすく、足をいためる方も。峠を越えて海
に向かうと陽がさしました。

笑われて歩く

「土屋さん、また女子高生に笑われていますよ」
と同行の方にいわれます。小さな子は私を指差

して「あのひと何？」と母親に聞いています。

網代笠にスポーツシューズ、時々携帯電話でしゃべってる。きつと変な人と思われていたのでしょう。網代笠の正面には「南無阿弥陀仏」と墨書してあります。「笑ってた子も『なむあみだぶつ』と読んでくれたかな？」などと思いつながら歩いて行きます。なかには、すれちがいざま深々とお辞儀をする方や、わざわざ道を譲ってくださる方もいらつしやいました。

四日目 十六日（木）くもり

三島→清水 48キロメートル

依所 静岡教区 実相寺

●五時十分起床、六時四十分出発、やっと渡った富士川は風が冷たく往時が偲ばれました。

アミダサマの足

捻挫をしたり、マメがつぶれたり、だんだん故障がでてきます。「痛い！ このままで京都

までもつのだろうか」痛い足をひきずっているうちに気持ちまで萎えてきます。「もし無理をして一生直らなかつたらどうしよう。もう止めるべきではないか」しかし「なむ〓身も心も捧げます」と称えています。そして三千礼拝の時のことなどを考えると「そうか！ 足がこんなに痛んでまで私を真実に目覚ましめようとする願いがあるんだ」と思えてきました。いやいや、それどころか「オレの足だと思つて痛がつてたけど、アミダサマの足だったんだなあ。念仏をしつかり称えなきや申しわけないなあ」もちろん、そう思ったところで痛くなくなるわけではありませんが、気持ちになりました。京都に着くまで何度アミダサマの足を拜んで堪えさせて頂いたことでしょうか。

五日目 十七日（金）強風

金谷→浜松 44・5キロメートル

依所 静岡教区 法永寺



箱根でひと休み、記念写真をバチリ。

● どんどん出発が早くなり、朝食前の行脚になります。ウォームアップが大切です。二十km先で1kmのトンネル通過。六十〜七十cmの緑石の上を出口の光を目指してただひたすら歩きます。排気ガスで蒸し暑く煙った空気を切り裂くように、トラックがすぐ脇をすり抜けていきます。引っ掛けられたら終りです。『二河白道』の話が身近に感じられました。「越すに越されぬ大井川」を渡って到着。

身体は知っている

左の足首を東京出発早々に捻挫しました。かばいながら歩いていました。右までおかしくなってきました。両足をひきずって歩いていますと、だ

んだん歩幅がせばまってシヤカシヤカ歩くようになります。そうするとカカトが痛くなり、次にヒザ、ついに腰まで響いてきます。早く進みたいので手を前につきだし前傾するのですが、ますますいけません。ところが身体中痛くなる、何か諦めのような気持ちになりました。「これだけいろんな所が痛んではしょうがない。もうかばいようがないってことは、バランスがとれてるってことじゃないの?」と開き直り、普段歩いている様子をイメージしながら「痛いのはあたりまえだ」と胸を張って大股で歩きだしました。すると不思議なことに歩けるのです。しだいに各部の痛みが気にならなくなってきました。身体はチャンとバランスをとるのです。頭でこうしようとするのではなく、身体にまかせていきますと、今まで気づかなかったことがわかってきました。体重が左から右へゆっくりと移動していくのがわかります。無理に足を出す

のではなく、腕を後ろに引くと身体がねじれ、次にその反動で足が振り子のように前へ振り出されるのでした。身体的神秘に驚くとともに「心もまた私が考えているより遙かに奥深いものにちがいない」と確信するようになりました。

六日目 十八日（土）晴

金谷→浜松 44・5キロメートル

依所 静岡教区 法永寺

●真つ暗なうちに出発、すぐ山道の登りです。御来迎を仰ぎ、白い息をはきながら進みます。三十六km過ぎに天竜川を渡りました。いままで何人の人と行き交ったのでしょうか。

オリジナルの地図を製作

十一月下旬、二泊三日で全行程を車で走って下見をしました。歩道があるかどうか、どちら側を歩いた方がいいか、などを調べたり、トリップメーターを見ながら「基点より一・七km右側、

○○コンビニエンスストア」などと情報を書き込んだ地図を製作。それをもとに日程表が作られました。夜のミーティングの時に配られ、実行委員長より一日の行程が説明されます。「二十八km左側ドライブインで昼食の予定です」なんて具合で、自分なりに明日の準備を始めます。

七日目 十九日（日）晴

浜松→小坂井 47・5キロメートル

依所 三河教区 延命寺

●海沿いに南下、旧松並木を通り浜名湖を渡ります。四日間歩いた静岡を後に愛知県へ。新幹線の高架そばに寄宿です。

道は傾斜している

歩道は必ず左右どちらかに傾いています。水はけのため、車の出入りのため、これがながいあいだに大変苦痛になってきます。平らなところを選んで歩きながら、だんだん腹が立ってき

ました。

「まったく歩く身になって考えてない。道路行
政はなっていない」冷静に考えれば、今どき一日
四十〜五十km二週間歩く人はめったにいません。
しかしホンのわずかなことが実はとても大切な
ことを思い知らされました。

八日目 二十日(月) 雨・強風

小坂井→星崎

依所 尾張教区 光照寺

●風が強く一日中雨、体力の消耗はもちろん精
神的にもきつい行程でした。歩きながらも、と
にかく食べるように心掛けました。

大荷物に四苦八苦

「枕と毛布も必要だ。着替えも多く持って……」
などとやっているうちに大荷物。車があるから
と油断をしたら私の荷物が一番大きくなってし
まいました。宿泊場所に着くたびに全部降ろし、

翌朝また全部詰みこみます。皆さんに本当にご
迷惑をかけてしまい申しわけなく思っています。
今となつては半分の荷物で充分だったと思いま
すが、後の祭りです。心の不安を物で解消しよ
うとしてさらに心を乱す。情けない。

九日目 二十一日(火) 晴

星崎→四日市 49・3キロメートル

依所 伊勢教区 光運寺

●体力に合わせ単独行。

長距離歩行はペースを守
ることが最も大切なこと
だと感じました。水や栄
養も一定時間で補給、な
るべく休まず体温変化を
避けました。穏やかな日
で木曾川、長良川の雄大
な流れに心を奪われまし
た。鏡のような水面に鳥



網代笠の内に「神人合一」と墨書。

が一羽。

コンビニはオアシス

歩いていて一番助かったのが、コンビニエンスストアです。水分・食料の補給やトイレ休憩に活用させて頂きました。何より有難いのは「あの看板までもう一息」とか「ああ、ここまでのどりついたか」という達成感を与えてくれたことでしょうか。

十日目 二十二日（水）強風

四日市→鈴鹿峠

依所 国民宿舎 関町ロッジ

●前夜、接骨医院へ治療にきました。それぞれテーピングをして鈴鹿峠へ。強い向かい風で体力を消耗、粉雪も舞いだし寒い一日でした。

網代笠のうちに神の足

網代笠の内側には、まっ正面に「神」、左横に

「人」、真後ろに「合」、右横に「一」と墨書しました。「神人合一」とは「如来とともに一人」、「天地と一体の妙境」を表す言葉です。明け方出発のときから夕方到着の時まで、なるべく「神」の文字から目をそらさないように心掛けました。「神」に集中するとき「観音さま」が憶念され、真剣に念仏申せました。ところがずっと視界に入っていないながら場面が気になったり、風がうっとうしくなったり、なかなか集中の持続は難しいものです。「こんないい環境にありながら念仏相續できないのか」と情けなくなりました。そんなとき「神」の字の下に前を歩く方の足が二本、目に入りました。あたかも神様の足のようです。痛む足をひきずっています。「ああ、観音さま」も私のために痛んでくださったっているんだなあ」と感じました。その方だけではありません。同行の方々は私のために来迎された聖衆、菩薩方でした。

「如来と一対一、いや如来が私を歩かしめていらつしやるのだ」そう受け取らせて頂く時、「私の苦行」は「如来の聖行」へと転化したように思えました。

十一日目 二十三日（木）小雪のち晴

鈴鹿峠→野洲 39キロメートル

依所 滋賀教区 仏法寺

●朝一面の銀世界、着られるだけ着こんで出発。覚悟は決めていましたが、向かい風で寒く体調をくずす方も。しかし雪は止んでくれ助かりました。遂に京都の看板が……。

唾棄すべきもの

一念即得往生と思ひながら、一方で「よしオレは京都までいつてやる」などと血迷います。如来の威力により活き働きがあるものにもかかわらず、口に「なむ〓身も心も捧げます」といひながら、心は名利を求めていることに気づきま

す。そんな時ほど情けなく自分の汚れた心を恥ずかしく思います。しかし自分を恥ずかしく思う心はどこから来るのでしょうか。つばを吐きかけられるような醜いモノをこそ救ってくださる念仏である。そう思い直して、全身全霊を込めて念仏しようと、次の一步を踏み出します。

十二日目 二十四日（金）くもり

野洲→比叡山

依所 延暦寺会館

●前夜は檀家宅で風呂の接待を頂きました。琵琶湖大橋は徒歩無料、川とは明らかに違う風を受けながら対岸へ。旧道を登り比叡山へ、一日前の雪が残るなか、道を間違えたりして二時間遅れて到着。山をなめてはいけません。

薬づけながら目標達成！

湿布薬だとか、痛み止めたとか、消毒薬だとか、ビタミン剤だとか、鉄分だとか、日がたつ

12泊13日の東海道念仏行脚は
姫子山知恩院で幕を閉じた。



はじめるので、保健室のよう、まったく情けないありさまでした。

十三日目 二十五日（土）晴

比叡山→知恩寺→知恩院 16キロメートル

●まだ暗い中、雪灯りを頼りに比叡山越え、修学院離宮裏へ降りて南下、知恩寺へ到着。御身拭い式参加後知恩院へ。中村康隆門主猊下にお目通りを頂き行脚報告、ねぎらいのお言葉を頂きました。

につれて薬への依存度が増していききました。確かに効き目があったて使う場合が多いのですが、病院で薬をもらわないと満足しない老人のように、私の場合安心を得るための手段となっていたようにも思います。フロから帰ってくるとみんな治療を

帰途は新幹線で2時間半

日頃クルマ中心の生活をしているものにとつて、長距離を歩くことは困難です。途中で具合の悪くなる人もおりました。しかし、念仏の行はありがたいことに「なむあみだぶつ」の一念にて往生は決定するのです。本願の念仏行脚に途中棄権はありません。念仏の衆生を摂取してお捨てにならないのがアミダサマのお約束ですから、脱落者はありません。

こうして念仏行脚は無事成満されました。帰りは新幹線にて二時間半、アツと言う間です。

「もったいないなあ」と感じると同時に「新幹線は本当に便利で安いなあ」と感謝の心がわきました。御歓待を頂きました御寺院を始め、有形無形の御援助を賜りました各方面に心より御礼申し上げます。

合掌



筑波そして銚子へ

文と写真——夏 攸吾

梅林の乙女、地図のこと……

地形図にあてた方眼紙、横軸の距離にあわせ、地図から読み取った標高を、斜度の変化あたまに入れながら縦軸に点記^{ちてい}していく。つぎに、それらの点を描線で結んでいくと、目標^{めく}す山なみの輪郭、断面図みたいなものができあがる。そうして現地に行けば、持参の図のとおり眺望^{たうぼう}が得られた。なるほど

地図はよくできて……。

私が芝中^{あさし}に入学してまもなく、ドイツ生まれのワンダーフォーゲルという、新しい野外活動^{アウトドア}がもたらされ、クラブができた。顧問になった地学の教師が、そのために必要な気象や地図の読み方を教えてくれたのである。

この地学の教師というのが、たいへんなアウトドアマンで、山野を踏破^{たふぱ}する身のこなしの軽く素速いこと、猿の



国土地理院の図化機（左）、
筑波山神社（下）

あだ名をたてまつられたほど。いちど奥会津の山道で蝮と遭遇したときなどは、ニンマリ不敵な笑みを浮かべたと思っただけと捕まえ、ちよちよいとナイフでさばいて蒲焼きにしちまい、このときばかりは毒蛇がかわいそ。はじめて蝮を食った少年たちはその晩、興奮してなかなか寝つかれなかったものである……。

そこで、その蝮……じゃなくて、地図の話をしようにとおもう。

最初の出逢いは、小学生。軍隊にいた叔父さんからもらった五万分の一の地形図、現在の国土地理院がまだ陸軍参謀本部陸地測量部だったころのもの。そのうちの一枚「厚木」の図であった



か、軍用地とおぼしいかなり広い部分が真っ白に抜けているのに、秘密のにおいを嗅ぎ冒険心そそられた覚えがある。

国土地理院の熱心な見学者
たち



想えばちやうどそのころから私の、放浪癖でえほど性根のすわったもんじやない、まねごと家出くりかえし癖がはじまっている。ついでにいえば、私の母方のお祖父^いちゃん^いは鉄道員だった。線路はつづくうよお、どうこまでもう……だ。知らないまああちを歩いてみたあい、どこかとおおくへ行いきいたあい……だった。

いまの私の気分、ほんとはそのへんの話をつばいしたいのだが。ここでは、さまざまな土地や人、風俗のことなど、写真もまじえて紹介するのが主眼だから、とりあえずおあずけ――。

このたび、私が属する日本旅のペンクラブ会員有志で、筑波研究学園都市

にある国土地理院を訪問、地図づくりの現場を取材しようということになった。旅の達人^ブはとうぜん、地図とか時刻表とかがたまらなく好きな人たち、なのである。

しかしまあ、どう考えたってこの訪問、色気にや乏しい。そこで私はみなさんよりひと足さきに、色気付け、つまり写真になりそうなところを見つけに行った。

筑波山梅林。そこは中腹、筑波山神社より少し下。とき三月の初っ端……だからまだ花の見ごろには早かったが、それがねらい。観梅の人も少なく、

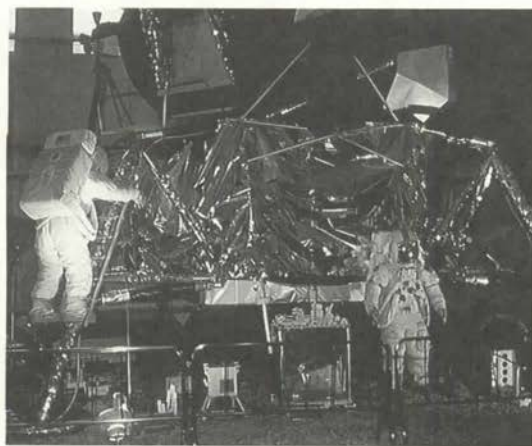
梅の香は盛りのまへの三分四分なのである。旅の達人^ブは、きちっと時

節を見きわめられる人、でなけりやならない。

そこで、この春卒業という女子大生ふたりに記念撮影のシャッターを頼まれ、チャンスいただき、撮らせてもらったのが巻頭の一枚というわけ。題して、

梅林に 卒業の乙女 咲きにおう

この写真、乙女たちの胸の下あたりまで迫る不思議な光の正体は、新たに詰め替えたフィルム最初のワンカットのいたずら。こういうことが好きな私は、それをねらって撮った。読者に夢を届ける旅の達人は、このようにみずから愉しめる人でもなければならぬ……
と、思っている。



筑波山の梅林は、白梅紅梅あわせて約三千株、地形の変化に富む趣において、水戸の梅林よりもおもしろ味がある。

それから麓におり、一行と落ちあつ



て国土地理院へ。

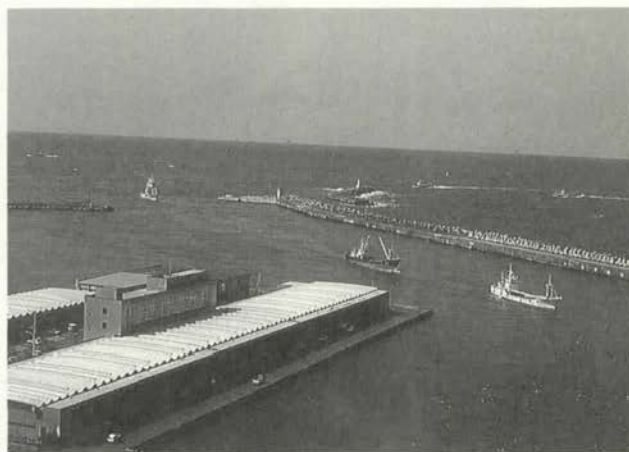
やっぱり海、そして魚……銚子へ

どうでした……。おもしろかったです
ねえ、やっぱり色気はなかったけど。
あの膨大にややこしい地図づくり、
むかしは熟練の手描き技であった。いまは
空撮写真をもとに、精密ロボットの図化機が
描く……といっても、いちいち細かい指示を
与えるのは人、すごく手間のかかること
にかりはない。そういう仕事に携わる方々
の案内だから、懇切丁寧である。ひとつと
こに四時間以上もかけての見学は、ひさし
ぶりだった。

国土地理院では現在、おなじみ全国

カバ―四三九七面の二万五千分の一地形図をはじめ、国土基本図や地勢図など、さまざまな用途別、二万点に及ぶ地図を測量、制作している。湖沼図や沿岸海域図もあり、すべて印刷まで。コンピュータによる地理情報データベース化も進め、一方、わが国初の実地測量地図という大業績、伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』の復刻もしている。さらに身近なところでは、地震予知連絡会を運営し、火山噴火予知にもあたって、それらの仕事ぶりまで見られるのだ。

とにかく古今、日本という国がまるごと詰まっているところ……。個人では無理だが、五人くらい集まれば見学



させてもらえるという。

さて、それから私はどうしたかという
と、銚子へ走ったのである。海を見

ずには帰れなかった。

その想いは筑波の山から、眼下にひろがる平野を眺めたときに、勃然とおこった。狭い島国に特有の凸凹^{でこぼこ}が好きな、これは私個人の趣味の問題だが、平べったい風景というのは拍子ぬけてとらえどころなく、こころに響かず、退屈で眠くなりそうだったからである。

麓の筑波研究学園都市にしても、それらしくはなっていない、頭も尻尾もない感じ、どこかい新興住宅地にすぎなかった。

一見、茶色いばかりの冬枯れの木々、目をこらし耳を澄ませば、若葉の芽や花の蕾が枝さきいっぱい、ぺちやくちやおしやべり、にぎやかな……国立科

銚子電鉄外川駅
下は銚子大漁旗の染元



学博物館の筑波実験植物園が、ほかではまあよかった。けれどそれだって、私ら学生時代にさんざ授業さぼって遊んだ、東京は小石川植物園の味わい深さには及ばない。

想うに、この街は造り過ぎなのである。そのままほっとくことだって、できなきゃいけないはずなのだが……。

暗く静まる霞ヶ浦、利根川の流れに沿って一路南東へ。銚子に着いたのは

夜おそく、料理で評判の旅館新月の夕食にはありつけなかったが、港のすぐそば、それだけでいい。

翌朝はさつそく、魚市場にてかける。近海底曳舟が入る、小型のダルマイカやホウボウがどっさり水揚げされる、市場全体が低く唸りを生じる……これがいい。

沖合いからイワシ旋網イサカの船が帰る、クレーン仕掛けの巨大なたも網が、ドットと獲物をダンプにぶちまける、おこぼれ狙って頭上をカモメが乱舞する……これもまたいい。

いきつけの魚屋で薄造りにするヒラメと、贅沢なホウボウの干物と、それから目刺しと醤油干しにするイワシを

一箱、買う、漁港には、こんな愉し
みがあるからたまらない。

犬吠埼では、沖ゆく船まで呑みこむ
海のキラキラに目を細め、しばしまど
ろむ。

それから、外川^{とがわ}に行く。銚子電鉄の
終点の、なにとはなしに気持ちのなご
む、この小さな港町^が私は好きだ。大
漁旗を手描き友禅で染める家がある。
これをいつか、だれかに贈ってあげた
いし、また贈られてもみたい。

屏風ヶ浦の絶壁に立って、私は想った。
日本という国^が、そしてその地図^が
おもしろいのは、なんたってこの海岸
線の、変化の妙に負うところが大きい。
山川も含めて国土の魅力を、もっと上

手に表現した地図^がはやくできてほし
いものである。

それにしても、伊能忠敬^がつてのは、
すごい人だったんだなあ……。



午後の日差しの中で

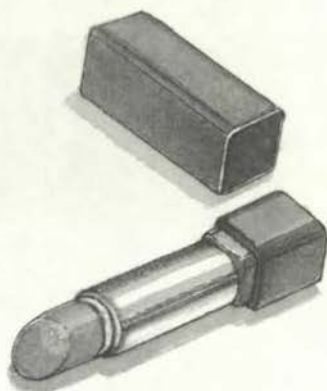
〈第四回〉

気遣い

吉川英明

自分の好きな食べ物は、他人にもおいしく食べて欲しいと思うのは人情だろうが、私の場合、特にそれが強い。

気に入っている物を、横でまずそうに食べら



れると、がっかりもするし腹も立つ。

ついこの間、青山のある中華料理店に、一人で昼食を食べに入った時のことだった。

オフィス街の飲食店の例に洩れず、その店も

正午を過ぎたのではまず座れないから、少し早めに行ったのだが、その日は、それでもほぼ満席だった。

一番隅のテーブルに案内されて隣を見ると、若い女性が二人、五目そばかなにかを前にして向き合っている。

私は、焼きそばを注文して、持っていた文庫本を開いて読み始めた。

だが、しばらく経つうち、どうも隣の二人が気になってきた。そばを食べている気配がない、つまり、音がしないのである。

見ると、二人の方が、井の横に頬杖をついて、半分ほど残ったそばを、箸でぐちゃぐちゃと掻き回しながら、しきりに何かしゃべっている。

聞き役のもう一人も、時々、相の手を入れては、そばを一本か二本ずつ箸でつまんでレンゲ

に乗せ、まずそうに啜っている。

隣の席のことなど構わなければいいのだが、気にし出すと妙に気になって来て落ち着かない。

どうして、近ごろの若い女性は、こう行儀が悪いのだろうと思ってしまう。

それに、そもそもその店のそばはうまいのだ。それを、なぜ、わざわざまずくして、いやいや食べなければならぬのか。

二人の井の中までは見えないが、その惨状は想像に余りある。汁は冷え、麺は、伸び切ってふやけているに違いない。

私は気分が悪くなって、本に目を戻した。

やがて、私はその不快なものから目を逸らせ続けながら、焼きそばを食べ終ったが、そのころには、三人、五人と、空席を待つ客で入り口付近は混み始めていた。

だが、私が席を立てて出て来る時も、二人の「食事」は、依然として進んでいなかった。周囲には、まるで無関心なのである。

いつもは美味なその店の焼きそばが、その日は、まことに悪い後味で消化も悪かった。

だから、数日後、八重洲ブックセンターの近くのラーメン屋に入った時、テーブルの脇に貼ってある貼り紙の文句を読んで、さもあらんと肯いた。

その貼り紙には、こう書いてあった。

「OLの皆様へ

昼どきは、大変混みますので、お食事がお済みになりましたら、なるべく早く、お待ちのお客様とお替わり下さい」

文言は、この通りでなかったかもしれないが、

とにかく、そういう意味のことが書いてあった。

その時は、昼の時間を少し外れていて、それほど混んでいなかったが、青山で不愉快な思いをしたばかりの私には、これを書いた店主の怒りがよくわかった。

周りの迷惑を気にしないとさえ、先日新聞の随筆欄で、ある人が、近ごろの女子大生は人に道を譲らないと、嘆いているのが目についた。

もうかなりな年配になるその人は、ある大学の近くに住んでいるのだが、一人で歩いていて女子大生の群とすれ違っても、誰一人脇へ寄って道を譲ろうとする学生がいないというのだ。

彼女らは、こちらが近づいて行くのをまったく無視して、おしゃべりしながら突き進んで来る。初めのうちは腹が立って、抗議しようかと

も思ったが、最近は諦めた。女子大生の群が来たら、自分の方から車道に下りて道を開けるようにしている、と嘆じている。

まるで、無法者ではないか。

しかし、これを読んで、まさかと思う人より、そうだろうな、と思う人の方が多いのではないかと私は思う。

それほど、今の若い女性は公共の場での周囲への気遣いというものをしない。いや知らない。若い女性に、こうした気遣い、気配りが欠けているのは、目の前の自分のことに熱中するあまり、他人のことにまで心が届かないのだとも思えるが、これが、年配の女性となると、話はちよつと違う。

年配者の場合、他人の迷惑は十分承知しているながら、自分の利を押し通すといった、図々し

さがそれに加わる。

ある日、羽田空港で見た光景など、その典型的なものだった。その光景に、私は肝を潰して動転し、しばらくは自分の目が信じられなかった。空港の一階のロビーで、私はチェックインを済ませてから、目につくように立ったまま、連れを待っていた。

私のすぐ脇では、四人連れの外国人が向かい合って立ち話をしていた。

そこへ突然、五十代中頃かと思われる女性が、キャスター付きのスーツケースを押しながら現れ、何の挨拶も会釈もなしに、立ち話をしている四人の真ん中に、スーツケースを割り込ませた。

そして、不意の闖入者に驚いて飛び退かった四人の外国人の間を、無言のまま、眉一つ動か

さすに通り抜けて行つたのだ。

さすがに四人も、啞然として女性の後ろ姿を見送っていたが、見ていた私も、これには腰を抜かすほど驚いた。

女性の行きたい方向に行くには、我々が固まって立っている一画を少し迂回しなければならなかったのだろうが、それとて、たかだか、一三メートルのことである。話をしている人たちの真ん中を無言で押し通るといふのは、普通の神経なら決して出来ないことだろう。

背後を迂回するのが面倒だからと、それを敢えてしてしまう凶々しさには、驚きの去つた後、怒りを覚えた。

女性ばかりを槍玉に上げると、抗議の声が聞こえそうだが、もちろん、立派なマナーを心得

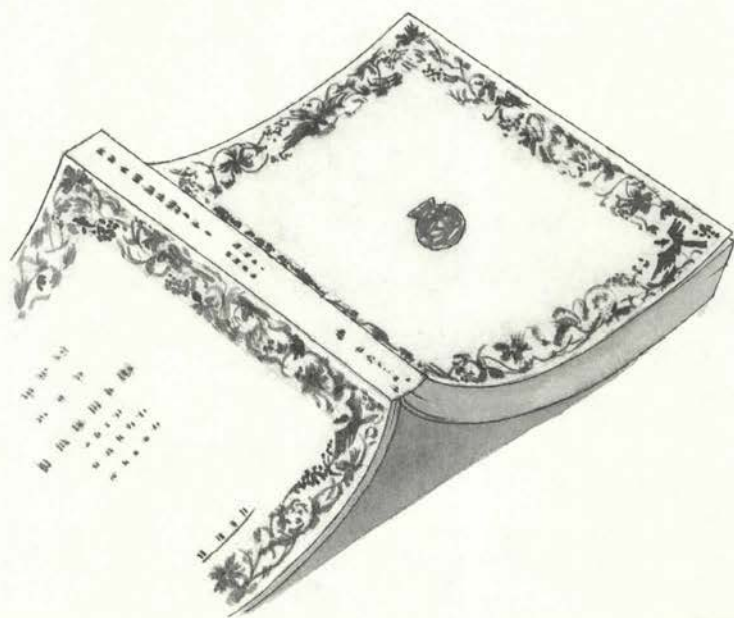
た女性は沢山いるし、逆に、男、特に若い男には、ひどい奴も多い。

電車の中で、股を広げ足を投げ出して座っている若者に対する怒りの声は、新聞などでよく目にするが、この間は東横線で、若者がドアのすぐ前に置いた大きなバッグに、中年の女性二人がつまづいて、危うく転びそうになったのを目撃した。

若い女性と男性の公共心のなさは、どっちもどっちと言える。

しかし、偏見だという非難を覚悟の上で言わせてもらうと、もちろん例外はあるものの、四十代以上の男女では、総じて男の方がマナーがいいと私は思う。

私は、以前書店をやっていたことがあるのだ



が、昼休みや夕方の方の激しい混雑を過ぎると、雑誌の平台は相当散らかる。

しかし、その場合でも、男性誌の売り場より、女性誌の売り場の方が、遥かに乱れ方が激しい。男性誌の方は、比較的簡単な整理で収まるが、女性の群が去った後は、大抵、目茶苦茶といった状態で、整理に手間が掛かると、雑誌の担当者も嘆いていた。

ある時、私は、ある衣料品輸入会社のバーゲンセールというものに初めて行って、何故そうなるかを理解した。

そのバーゲンの招待券を貰い、たまたまその会場が、私の仕事場の目と鼻の先にあったので覗いて見る気になったのだ。

早めに行かないと駄目だと言われて、開場す

る十時少し前にそこへ着いた。既に二十人ほどの行列が出来ていて、気が重くなったが、せっかく来たのだからと開場を待った。

ドアが開いて、驚いた。

私の前から後ろから、身なりのいい女性たちが、並んでいた順番もものは、わらわらと我先に会場になだれ込んで行く。そして、いくつもの大台に、きれいに仕分けして積んであるセーターやブラウスに、まるで蟻が群がるように取り付き始めた。

その勢いに気圧されて見ていると、品物の選び方が、また凄まじい。

セーターを取り上げて広げて見て、気に入らなければそのまま投げ捨てる。次は、伸ばせるだけ手を伸ばし、遠くの山から一番下の一枚を

引っぱり出して手繰り寄せ、こねくり回してまた捨てる。

台の周囲に取り付いた全員が、一心不乱にこれを繰り返すものだから、きちんと積んであった高価な舶来衣料も、あつという間に、襪褌の山のようになつてしまった。

男物のセーターも沢山あるのだが、私の神経では、とてもその間に割り込めず、会場の隅にぶら下がっていたネクタイを一本買って、さすがと帰つて来たことだった。

仮に、同じ会場に、同じような年配の男性たちを同人数入れた場合、あそこまでの混乱には決してなるまいと私は確信する。

どうして、あれほど他人を無視出来るのか、私にはわからない。

幕末から明治初頭にかけて日本を訪れた、外

国人の印象記を読んでも、この島国の国民は、極めて礼儀正しいと筆を揃えて書いている。

あれは、彼らの見間違ひだったのか。それとも、たかだか一世紀余の間に、こうなつてしまつたのだろうか。

偉そうなことを書き散らして、じゃあ、お前はどうなのだと言われそうだが、私は、少なくともこの件に限れば、胸を張れる。

日頃から、一歩表に出れば、決して他人に迷惑を掛けまいと気を遣っているからだ。別に、汲々とそうしているのではなく、習性となっているから、自然体でそうなる。

もし、私の行動にこの言葉に反するようなことがあつたら、遠慮なく咎めて欲しい。

私は、自分の気遣いの至らなかつたことを、深く心に恥じて即座に改めるだろう。(作家)

キャスターを辞めるの弁

利根川 裕

この三月いっぱい、わたしはテレビ・キャスターを辞めることにした。

ふりかえれば、十三年と六カ月。ずいぶん長いキャスター勤めであった。出演した回数でいえば、二千五百二十一回。

その間、いっぺんも休みをとらなかったのだから、まあ真面目な勤めぶりだったが、ちかごろは皆勤なのは、あまり褒めたことではないらしい。

毎年夏になると、キャスターたちは二週間か三週間の休暇をとって、どこか海外でリフレッシュするのが例である。そんな中で、ひとりわたしだけが夏休みと無縁にしているものだから、ひよっとしたら変屈な男と思われるのか、毎年どこかの新聞や週刊誌が、なぜ休みをとらないのか、という取材にきた。

そこでまた、わたしは毎年、おなじこ

とを答えてきた。

——夏休みですからと店を閉じるなら
ともかく（つまり番組そのものが休みに
なるならともかく）、店を開いている以上
（つまり番組がある以上）、店員たちが代
る代る休暇をとるのはともかく、お客さ
んが来て下さるからには（つまりテレビ
視聴者がいるからには）、主人が休暇をと
っていても申しわけないと思うからで
す——

——テレビのキャスターというのは、
いってみれば、やとわれママみたいなも
ので、ひとりでもお客さまがあるからに
は、目立ってきた顔の皺にお白粉を塗り
こめてでも、毎日毎日お店に出るのが勤
めと心得ています——

以上のようなわたしの答は、わたしと
しては少しもケレン味のない本心であつ
たが、聞く側からすれば、どこかワザと
らしく、批判がましい言いぶんを受けと
められたようでもあった。

あるいは、親しい記者のインタビュ
ーには、こんな答えかたをしたこともあつ
た。

——わたしは、サラリーマンではなく
自由業です。自由業というのは、つまり
は日雇人生ということです。毎日毎日、
きょう一日、きょう一日と思ひ定めての
暮しをしているのです。このいじまし
さに、自由業のプライドがあるのです。休
んじやったらカネがとれない。あるいは、
休んだからにはカネはもらわない。自由

業者には有給休暇なんて考えかたはありません。また、あつてはなりません——ケチとプライドに、カッコつけたような話かもしれない。

キャスターを辞めるにあたつて、わが心中で一番ほつとしているのは、これで恥ずかしさから解放される、という思いである。

テレビ出演者というのは、顔をさらす稼業である。さらす仕事を引き受けた以上、それが恥ずかしいというのは、キザないいぶんにもなるが、この十三年來、恥ずかしいと思いつづけていたのは、掛け値のない事実である。

縁もゆかりもない人の前に、ぬけぬけ

と顔をさらし、しかも、もつともらしく思われるように顔をさらすというのは、かなり恥ずかしいことである。

むろん、こんなさらしかたをするのを恥ずかしいと思わない人がいる。テレビ局のアナウンサーになろうと志望する人も、テレビタレントになろうと思う人にも、こんな恥ずかしさはない。テレビ・アナや、テレビ・タレントは、本能的にテレビ画面での露出度が多ければ多いほど満足である。

テレビに出るということは、端的には人に顔を見知られるということである。そのかぎり、知名人になる。あるいは、有名人になる。

そういう意味では、わたしもそれなり

の知名人になり、有名人になった。そして、通俗的には、それなりの恩恵にもあずかった。そういう恩恵を嬉しがったのも事実であるし、少々自分を得意な気持ちにさせてきたのも事実である。しかし、恥ずかしかった。これも、まぎれもない事実である。

ごく普通にいつて、テレビに出るのはカッコのいいことであって、しかも身入りのいいことである。日のあたる稼業である。そういう日の当たりかたをしてしまった、という自分自身に対する恥ずかしさが、わたしにつきまといつていた。きつとわたしには、日の当たるような人生をしてはいけない、という気取りがあつて、にもかかわらず、ぬけぬけとそうい

う稼業に身をあずけたという恥ずかしさがあつたのである。

わたしはもともと、原稿用紙に字を書いて、それで自己表現をしようと思つてた人間である。自己表現というのは、いうまでもなくそれによつて人々から承認されたいという願望をもっている。だから、自分が自分のたてた志の成果によつて、人びとから承認され、知名人になり有名人になるのは、少しも恥ずかしいことではない。

が、いまわたしが、少々知名人であり有名人であるのは、自分のたてた志の成果によるものではなく、たまたま出演することになったテレビの結果によるものであることで、たいへん自分を恥ずかし

く責めているのである。そして、この自責の恥ずかしさから解放された日は、一日もなかった。一日もなかったどころか、そのことが日一日と、わたしの中で募ってきていたのであった。

テレビの仕事を引き受けるとき、わたしにはある怖れがあった。

わたしはそのとき、すでに五十歳を越えていたし、まがりなりにもわたしはわたしの人生を構築していた。そしてわたしの構築していた人生は、活字文化によるものであった。わたしの感性、わたしの教養、わたしの人間観、わたしの人生観、これらはことごとく、正統派の伝統性をもつ活字文化によって培ってきたも

のであった。

そういう五十数歳の人間が、きわめて新しい電波的映像世界の渦中に身をおいたとき、いったいどんな変化が起きるのか。

わたしが、わたしなりに築いていた自分の文化体系が、あわただしく無残にも切り崩されてゆくことになるのかもしれない。そんな怖れであった。

そしてわたしは、こう心を決めた。これまでの自分が、テレビという異文化のために、あえなく崩壊するかもしれないが、それならそれで、これまでの自分というものが自分と思うほど堅固なものでもなかった、ということの証明なのだから、これは致しかたのない成りゆきである。

ともあれ、自分を実験台に掛けてみよう、と。

十三年半のテレビ体験によって、自分がどんなふうに変わったか。どんなふうに崩壊し、あるいは、どんなふうに新生したかは、にわかにはいえない。

テレビ表現には、テレビ表現なりの面白さがある。そして、その表現の可能性はもつともつと広がってゆくであろう。その多彩な強力ぶりには、とても文字表現では追いつけないほどのものがある。

十数年のあいだ、そういうテレビ表現の面白さは、ずいぶんと感じとってきた。しかしわたしは、いつもその半面、何かあきたらないものをも感じつつづけていた。その何か、を適確に指摘することは出

来ないが、あえていってみれば、人間には文字表現でなければついに表現できないものがあるのではないか、というこだわりである。

数年前から、わたしのなかで、そのこだわりの次第に増殖するようになった。テレビ表現と自分との間の乖離である。

テレビ表現に参加してきたことによって、テレビ表現の威力をも知ったが、逆にかえって、文字表現のかけがえのなさを自己確認することにもなった。

そういう自己確認を大切にしたい、という思いが次第に募ってきたので、十数年のキャスター勤めに、みずから終止符をうったのである。

(テレビ朝日系キャスター・作家)

現代の快僧その三

浄土真宗 慈恩寺住職

小泉敬信こいずみ けいしんさん

がん患者とともに

取材文 稲葉小太郎



平和活動家として世界的に高名なベトナムの
禅僧、ティク・ナット・ハン師が一九九五年四
月に来日することが決まった。ベトナム戦争へ
の抗議行動が原因で国外追放され、現在は南フ
ランスに仏教者のための共同体「プラム・ビレ
ッジ」を開き、難民の孤児たちを自分の子ども
として育てている。今回の来日では数回のリト
リート（瞑想の集会）や講演が予定されている
が、年齢からして初めて最後の機会になるだろ
うといわれている。日本での受け入れ先が知人

こいずみ・けいしん●一九四九年島根県に生まれる。龍谷大学卒。七九年より十三年間ハワイ開教師として活動する。帰国後神奈川県横浜市緑区に慈恩寺を開く。八七年より「仏教ホスピスの会」会長。☎03(55565)3418

なので、ぼくもなにかの形で手伝いたいと思っ
ているところだ。

最近ではハン師以外にも、海外の仏教者の活
躍をしばしば耳にする。サルボダや運動で名高
いスリランカのアリヤラトネ師、アメリカの女
性仏教学者ジョアンナ・メイシー、カンボジア
和平方に貢献したマハ・ゴサナンダ師……。彼ら

をひとつのキー・ワードでくるとすれば、「行動する仏教」とでもいったらいいだろうか。実際、欧米では *socially engaged buddhism* = 社会運動に携わる仏教、地球仏教という呼び名が定着しているそうだ。

仏教を、宗教界という狭い枠組みから解放して、実社会のなかで生かしていくこと。もちろんそれは単なる社会改革のための運動ではなく、個人の内面的な改革と歩を同じくするものだ。こうしたことは社会にとって有益なのはもちろんだが、同時に仏教者にとって必要なことだと思う。その過程で仏教とはなにかという問いが深まるからだ。

では、日本においてはどうかだろうか。『宗教年鑑』によれば八万の寺院を有し九千六百万人の信者を抱える日本の仏教は、ぼくたちになにをしてくれるのだろうか。

もちろん現代における仏教のあり方を問う動

きがないわけではない。各教団のなかでも、危機意識をもっているひとがいらないわけではないだろう。しかし、そうした議論もぼくら一般人とはかけ離れた世界のことという気がしてならない。

それは、それら議論があくまで仏教の専門家の立場からなされているからではないだろうか。もう一步踏み込んで、僧衣さえも脱ぎ捨てた人間としての答えが聞きたい。そうでないと実感がわかない。「ほんとう」だという気がしないのだ。

今回ご登場いただく小泉敬信さんは浄土真宗本願寺派の僧侶であり、さらにそこから一步踏みだした社会運動を展開する「仏教ホスピスの会」会長である。

この葬式坊主が！

「仏教ホスピスの会」は一九八七年八月に発足、

毎月第二土曜日に東京の築地本願寺において「が

ん患者・家族の語らいの集い」を開いている。

「発足以来六年間、一回も休まず続けています。

つい先日、二月十二日の大雪の日にも三十人が集まりました」

と小泉さん。現在の会員数は約百二十人。常時七十名前後の会員が集まり、初めの一時間は講演、残りの二時間は四つの小グループに分かれてみんなが抱えている問題を話し合う。それぞれのグループには僧侶、医者、看護婦、かつてがん患者を抱えていた遺族、患者本人がいる。医学的な質問は医者が、看護に関する悩みには看護婦が答える。患者の気持ちを知りたい場合には現役の患者が、家族としてどんなことが必要かについては遺族が答える。そして最終的にこころの問題については、そのひとが指定する宗派の僧侶が答える。参加するお坊さんは十五〜二十名という。

そもその発端は八三年、首都圏在住の青年僧侶らが「仏教情報センター」を創立し、「仏教テレホン相談」を開設したこと。当初は仏事についての相談が多かったが、次第に人生相談、家族のことなど問題が多様化し、がん患者の家族からの相談も増えてきた。こうした傾向を受けて、八六年春「仏教ホスピス研究部会」が発足。僧侶を中心に病院や家庭を訪問して話を聞くようになった。が、すぐにそれでは飽き足らなくなり、僧侶・医療関係者・カウンセラー・がん患者・その家族が協力して「語らいの集い」を始めた。

これはあくまでも本音を語る場所である。小泉さんはもちろん僧侶の立場で参加しているのだが、単に仏教上の知識から答えるのではなく、人間としてどう感じるかを大事にしている。

「法衣を脱いで、背広で行くこともあります。自分はお坊さんなんだという意識で行ったら輪



慈恩寺での法話では奥様がエレクトーンを弾く。

に溶け込めませんから」

とはいえ患者さんだって、面と向かえばいいづらいこともあるのではないかと？ そう聞くと、きっぱり、まったくありませんと答える。

「私たちの目の前で、この葬式坊主が！ と吐き捨てるような言葉を聞いたこともあります。

医者に対する悪口もバンバン出ます。これは本音をぶつけ合う場。質問するほうも、答えるほうも本音を出さないと相手にされません。確かに先祖代々の旦那寺の住職に対してはいいにくいこともあるかもしれない。でもここではお互いの利害関係は一切ありません。いっ放しで、イヤだったら次からは来なくてもいいんですから」

ずいぶんすさまじい話だが、ぎりぎりのところに追い詰められた患者たちにとっては、質問に対して答えてもらうというより、自分の抱えている悩みや問題を表面に出すこと自体に意味があるのかもしれない。

だから、司会をする僧侶の教育も大事になる。

こちらから人生観を押しつけるのではなく、問題が表面に出てきやすい環境を作ることが重要だ。そのためにはそれほど深刻でない参加者に先

に話してもらい、次第に問題が深いひとが話しやすいよう流れをもっていくことにしている。
「お坊さんのなかには相手がちよつと話すとその倍も返してしまつて、問題が出てくる前にぜ



「仏教ホスピスの会」の旅行には多くの人が集まる。

んぶ答えてしまうような者もいます(笑)。そう
じゃなくて、これ以上黙っていてもなにも出て
こないというところを見極めてから始めるよう
お願いしています」

死んでいくのも自然な姿

死を間近にして振り絞るような声で、「死ん
だら、どうなるんでしょうか」と尋ねてくる患
者もいる。思わず返答につまってしまう。そんな
ときはその場かぎりの回答をするのではなく、
問題を持ちかえつてじっくり考え、改めて次の
機会に話し合うということもあった。

「生きたい、生きたい」ともがきながら様々な
民間療法に頼つて、大変なお金を使っている患
者さんもいた。もちろん、病気はいっこうによく
ならない。そのことを何度も話し合ううちに逃
れることのできない現実に気づき、もがくのを
止め、死んでいくのも自分の自然な姿なんだと

価値観の転換が起こった。小泉さんは、その現場にいられたことは大きな財産だという。

つまりこの会は決して患者のためだけではなく、僧侶としての自分を確認していく作業でもあったのだ。

「患者さんになにかを教えてあげようと思って来たけれど、教えることなんかなんにもなかった。むしろ自分の問題として、仏教とはなにか、誰のためにあるのか、考えさせられた」

と語る僧侶もいたという。

「もともと仏教は死ぬのが当たり前、というところからスタートします。それなのに世間の風潮のなかで、生きるのがよいこと、死ぬのは敗北だと教えられてきた。でも、そうじゃないんだ。死というのはいい悪いじゃなくて、生きている現実そのままの姿なんだ、ということが私も実感できました。生死一如ということを、生きた患者さんから教わっているんです」

では、もし小泉さんが死ぬとしたら？ そのときどんなふうに考えるだろうか？

「浄土真宗では、死は終わりではなく通過点。死んだら必ず仏の世界に生まれ、仏として生きている人間と係わっていくことになります。でも、死に直面してどう感じるかはその場になってみないとわからないですね。怖いと思うかもしれないしイヤだともがくかもしれない。でも、今の時点では、死は敗北でもなんでもなくて、自然なことだと考えています」

お坊さんは人生の相談相手

医療関係者によるホスピス活動は増えてきているし、僧侶らによる勉強会の存在も聞く。でも僧侶と医者と患者と家族が集って、ひとつの問題を考えようとする「仏教ホスピスの会」の活動はユニークな試みだ。机の上で考えていては、こういう視点は生まれにくい。

小泉さんのこうした発想を育んだのは、ハワイにおける十三年間の開教師としての活動である。ではここに至るまでの小泉さんの軌跡を振り返ってみよう。



1977年9月11日、ユハラ本願寺の落慶式。

小泉敬信さんは一九四九（昭和二十四）年、島根県の寺に長男として生まれた。京都の龍谷大学を卒業する際、本山からアメリカへ伝道に行ってみないかといわれた。そのころ小泉さんの親戚が何人か現役の開教師をしていたので、違和感はなかった。「じゃ、行ってみようか」という軽い気持ちで出掛けていった。二十三歳、エメルギーにあふれる年齢だった。ところが……。「行ってみたら、こりやあ大変だ。そう簡単には帰れないぞ、というのがわかったんです」

同じ仏教の、同じ浄土真宗本願寺派といっても、日本とハワイでは僧侶のあり方がだいぶ違う。たとえば日本人に「お坊さんの仕事ってなんですか」と質問する。答えはほぼ100パーセント「お葬式と法事」だろう。ところがハワイで同じ質問をすると、「冠婚葬祭あらゆる場においてくれるひと、人生の良き相談相手」という答えが返ってくるそう。涙を流す場面でも

喜ぶ場面でも、そこには必ずお坊さんがいる。

日常生活のなかに宗教があるのだ。

なかでも一番びっくりしたのは、僧侶が病院を訪問する習慣である。

「アメリカではどんな小さな病院でも必ず、宗教家が使うための部屋が用意されていて、すべての入院患者の資料が揃っています。そのリストの中から仏教徒の患者を探し出し、患者のベッドまで行つて話しかけ、悩みを聞くのです」

病院付きの宗教家のことをホスピタル・チャレンという。日本なら病院に僧侶が入っているわけばむしろ縁起が悪いといわれそうだが、向こうではそれが当たり前なのだ。そして患者たちに直に接することの難しさについて『がん体験』（春秋社刊）という本のなかで、小泉さんはこんなふうに書いている。

小泉さんがハワイに着任したその日、案内されて病院に行った。初めは戸惑ったが、そこは若

さ。ひとりひとりの患者に、苦しみを乗り越えるためには仏教が必要なんだ、今こそ仏の教えを聞かねばならないと力を込めて説いて回った。

ところが何日が続けるうちに、おかしいことに気づいた。自分の話を聞く患者たちがどうも真剣に聞いていないようなのだ。そしてある日、末期のがん患者が悲しそうな目をしていったひと言に愕然とした。

「元氣な先生には、今の私の苦しみは絶対にわからん」

それまで一方的に自分の考えを押しつけていたことに気づいて、返す言葉もなかった。どうしていいかわからず先輩の開教師に相談したところ、こんな答えが返ってきた。「患者も自分たちとともに死すべき存在であり、その意味では決して異なる立場ではない。ならば患者に教えるのではなく、同じ立場からともに救われる道を聞いていくべきだ」。この言葉は今でも小泉

さんのところに刻み込まれている。

手作りの寺

ハワイでの活動はチャプレンだけではなく、信徒の婚姻届けにサインするのも僧侶の役目なら、日曜にはサンデー・サービスといってみなてお経を詠み、コーヒーを飲みながら話し合う場もある。個人的な相談やカウンセリングも行なう。それこそ気が休まる時間がない。しかも僧侶は雇われている立場。月に一回の役員会で、今月は何回病院や老人ホームを訪問したか、何回相談を受けたかなど活動を報告しなければいけない。

なかなか厳しい環境だが、その一方、社会全体が宗教家を大事にしてくれる。ひとびとの結びつきも強いし、名士と会う機会も多い。

気がつくともハワイに来てから十三年がたった。このまま一生アメリカの伝道をやってい

こう、故郷の寺は弟に任せて、自分はここに骨を埋めようと決意を固めた。

日本にいる友人から都市開教の話聞いたのは、その直後のことだった。関東地方には浄土真宗のお寺が非常に少なく、地方出身者のころの拠り所がなく困っているという。考えてみればアメリカでの伝道活動はアメリカで生まれた二世三世たちが担っていく時代、わざわざ日本から僧侶が行くというほうがおかしいかもしれない。そこで決意を翻して帰国、都市開教に身を投じることになった。

「横浜に家を借り、さあこれからだ、というときは怖かったですね。とにかく周りに知り合いなんてひとりもないんですから」

スタートはまずチラシを作り、家族四人で自転車を押してポストに入れて歩く。反応はかばかしくない。なにしろ自分の家の宗派を知らないひとがほとんどなのだ。

「お宅は何宗ですか」

「さあ……、田舎に聞いたらわかるんでしょうけど」

という会話が繰り返された。



港北ニュータウンのはずれに建つ慈恩寺。

それでもなんとか自分の力でやっていこうと思っていた。寺を建てる時も誰にも寄付を頼まず、土地も建物も銀行からの借金で買った。そんな姿を見て共鳴してくれる葬儀屋さんが現れた。寄付を募りながら自分たちは贅沢している僧侶が多いなか、相談するひとにお金の迷惑を掛けないお寺さんだと、遺族を紹介してくれるようになった。

設計から携わった寺は四年前に完成した。白い壁、正面玄関にはローマ字「JIONJI HON GWANJI MISSION OF YOKOHAMA」の文字。青空をバックにすると日本とは思えないような風景だ。小泉さんが「ウエディング・ドレスを着た花嫁が出てきてもおかしくない」というのもよくわかる。本堂の荘厳も金色に塗られていて、ふつうの寺とはイメージが違う。

「お参りに来たがん患者さんが暗い本堂にポツンというなんてことがないよう、できるだけ明

るい霧囲氣にしようと思ひまして」

もともと仏教では仏を光であらわす。だから本尊があるところはお寺で一番明るくなければいけないと考えてのことだ。

ゼロから始めた寺も、門徒が百軒、信徒は九百軒に急成長。お彼岸には四回に分けて案内を出したほどなのに、今でも毎月二十軒ずつのペースで増えているというからすごい。

ところで、仏教を批判するときいつも話題になるのは、不明確なお布施や戒名料の問題だ。

この問題について小泉さんに聞いてみた。こういう現代的なお寺だから、すっきりした回答を出してくれるだろうか。

「浄土真宗では法名は釈○○の三文字か、その上に○○院がついて六文字になるかの二種類しかありません。でも、その金額は決まっていな

込んでしまう。でも、事情によって出せない場合だってあるはず。一生の間でいいときばかりではありませんから、一番大変な方たちを基本にしてやっていきたいと思ってるんです」

この考えには大学時代に山岳部にいたことが影響しているらしい。山を登るときは一日のスケジュールは一番力のない者に合わせて立てる。そうしないとすべてが崩れてしまうからだ。お寺も、そういう気持ちでやっていきたいという。

戒名料やお布施の額が決まっていない理由が、初めて納得できた、と思う。

ここまで読んでおわかりのとおり、都市開教とホスピス活動は同一線上にある。都会では自分の寺を決めていないひとがほとんどという状況で、生死の問題に突き当たったときに相談できる相手がいない。旦那寺があっても、法要と葬儀のときのつきあいだけで、個人的なことではなかなか相談に行きにくい。

小泉さんの活動は、こうした現代の、日本社会の問題とつながっているのだ。

岐路に立つ仏教ホスピス

小泉さんの語り口調はとても穏やかだ。今、取材したテープを聞き返しながらこの原稿を書いているのだが、ずっと聞いていたいという気持ちにさせる柔らかな声音である。しかし、その声の裏には仏教に対する確信が感じられる。そうでなかったら、一銭の収入にもつながらないホスピス活動を何年間も続けるのは難しいだろう（小泉さんは「仏教ホスピスの会」の会長なのだが同時に会員であり、年会費三千円を払って活動しているのである）。こうしたことがもつと知られてくれば、葬式仏教という批判も減るはずだと思う。

その「仏教ホスピスの会」は今、岐路に立っている。同会は最初に記したように「仏教情報

センター」の下部組織として運営されてきたが、もっと大きな運動として展開するために四月一日から独立して活動を開始することになったのだ。

これからは患者さんが望めば家でも施設でも入院先でもどんなところへも出掛けていくという。すでに小泉さんは月に一回老人ホームへの訪問も続けている。毎月第二土曜日の一時三十分からの「がん患者・家族の語らいの集い」ももちろん続けていく。最近ではがん患者だけでなく、エイズ患者の参加者もいるという。

ひとりでも多くの方々に、こういう場があるを知ってほしいと思う。

著者プロフィール いなば・こたろう◎一九六一年神奈川県生まれ。東京大学文学部印度哲学専修過程卒。祖父は福井県の日蓮宗妙海寺住職だった。著書に現代日本の宗教事情を描いた「コンプレックス・メインド」（大蔵出版）がある。自分について考える雑誌「WHO ARE YOU」主宰。

念仏信仰と武士道

高橋富雄
イラストレーション＝小菅 遼



そこで、具体的に、どんな話が、どんなふう

この人たち、鎌倉武士がどういうふうに従生の門をくぐるようになったかということを考えて

みることになります。

禪宗などによって、鎌倉武士は大変大きく感化されたというような説明が一般には常識的になつています。私はそれを強いて否定しません、法然上人のこの武士道物語は、それだけにとどまっていはいけないことを警告しています。この武士道の信仰記録を読ませていただきたい、しみじみ思うのですが、禪にはどこかまだ硬いところが残っているのではないか。本来に武士たちは禪の心を底に突き抜けるところまで、心底、仏様のありがたさまで導かれていたのだろうか。そういう気がします。安心立命、不惜身命、そういう漢字信仰には至り着いていたでしょうが、その四角い漢字を円い悟りの心に悟了することができたのかどうか、私は一抹の

不安を禁じ得ないのでございます。

これは決して禪がだめだとか、浅いかいことを言っているのではございません。ただこれは、漢字というものがちゃんとわかる人でなければだめな世界です。「一枚起請文」にいういわゆる「智者の学問」のみよくする世界なのです。漢字というのは、今日、これくらい文化が進んだ日本の学校でさえも、難物です。漢字が多くなればなるほど理解ができないので、できるだけ漢字を使わないようにすること、これが教育の基本になつているのでございます。これだけ教育が進んでもこうだとすれば、一文不知と言われた人たちの間で、漢字だけによってその心が表されるような真理が、心底、血肉になるといふのは非常に難しいことです。無理で



す。

私はそんなふうに考えまして、禪がもし武士をよく指導して、信仰を深く生死を越えるところまで導くことができたというのだったとしますと、法然様のように、今日でも全然注釈を加えなくともちゃんと読めるような、そういう言葉、文字でもって書き表され、説き示されている専修念仏・往生決定の教えはなおさら、その悟心を強く導いたと思うのです。いや、このほうがかえって武士たちに真実仏様との出会い、すなわち往生決定の心、喜びをより深いものにしていたのではないかと思うのです。

そして、そのところに法然様という方の偉大さがあります。この方は、あんなに難しい本の『選択集』を漢字だけで表現できるお方です。

そういう智恵の法然と言われた方が、こんなやさしい日本語でお話しになる、お書きになるということの大切な意味を、私たちは改めて考え直す必要があると思うのです。難しいことをやさしく言うことは、一番難しいことです。そして、やさしく言って深い意味を実感させることは、一層難しいことでもあります。やさしく言いますと、何となく玄関から奥座敷まで見えてしまうのでございます。奥まで見えて一層奥床しいという印象を与えるか、「何だ、これだけか」というふうに軽く考えさせてしまうようになるか、そこに本当の意味の人間の深さの問題があります。法然様という方は、わかりやすく話すことによつて一層深い方であると、相手に実感させることができた点で、本当に学問のわかつ

た人、本当に智恵のある人、そういうことのできるお方でございます。

以下は実際にあった話で、この『行状画図』にも出てくるのでございます。

板東の武蔵の国に津戸三郎為守という武士がおりました。本当に乱暴そのものでした。人殺しなど平気という荒武者でした。もちろん学問のガの字もわからない、字は目に一丁字もない、そういう人間でした。しかし、京都に上がって、法然様のお話を聞いて信心を起こし、それから熊谷と並んで、板東における二人の念仏行者として、いつも法然様から推奨される信者になっていったのでございます。

この方は熱心に念仏を周りの人たちに説き勧

めて、急に六十人近い同行者が出たそうでございます。今日ならこの程度では大したこともないでしょうけれども、この時代、六十人からの信者がその周りに出てきたということになると、何か同志をつくって不穏なことを企むのではないかといったような嫌疑が、周りから持たれたというのもつともでございます。それにつけて、他宗門の人たちは、専修念仏の邪宗門に津戸はみんなを引き入れていると宣伝をして、鎌倉の將軍に訴えたというのでございます。時は三代將軍実朝の代でした。頼朝の子供でございます。

幕府でも放っておけない。そこで、「出てこい」と、出頭命令が出たというのでございます。「一体どういう信仰をどんなつもりで説き広め

ているのか、この場でちゃんと申し開きをせよ」。

幕府の裁判所に出頭して申し開きをせねばならなくなつたのでございます。荒武者津戸為守もすっかり慌ててしまいました。自分は法然様から教わつたことをただそのとおりに覚えて、その通りに信じ切り、周りにも伝えて、その情熱で同志を集めただけです。裁判所に行つて法律論で、いいの悪いのなどという教理にわたるようなことを申し開くことなど、土台できるわけがない。すっかり動転してしまつて、法然様のところに手紙を出したのでございます。

こういう手紙でした。「こういう次第で鎌倉に呼び出されて、信仰の趣旨や目的について申し開きするように命令されました。私は自分の力でとてもそういったことについてちゃんと答

える自信はございません。どうぞ先生、私が答えることができるように、わかりやすく、浄土宗の念仏の宗義について書き送つて、私を助けていただきたい。くれぐれもお願ひすることは、漢字ではだめです。ちゃんと私のわかるような仮名文字で、わかりやすく、丁寧に懇切に書いて教えていただきたい」。そういう趣旨のものでつたそうです。

これを聞いて法然様、丁寧にこの愛すべき弟子のために弁明書を代筆してくれたのでございます。その文章の要約されたものが、この『行状画図』に載つております。全部、仮名書きです。ですから、要点をとつていると思ひますけれども、今見るところのものは、どうも一文不知の人がわかる内容ではないのです。これは察

するに、『行状画図』の作者が自分の教養、学問の線で整理したものであらうと思います。法然様ご自身の文章はもともとわかりやすいくだけたものだったらうと思うのでございます。

そして『行状画図』というのは舜昌という叡山の功德院の住僧が書いたものでございます。我から見ると大変わかりやすい文章になっているのですが、そのわかりやすい人でもなおかつ、自分の言葉、自分の文章でまとめると、かなりに学者的になってしまっているのでございます。これは私もそうです。先生方も同じだと思います。私たちは大変わかりやすく、みんなにわかってもらえるような言葉で話しているつもりでも、知らず知らずのうちにプロ的な言葉になるのではないか。学者的な発想によって物事をとらえ

るようになるということを、私は痛感しているのでございます。閑話休題。

津戸は、こうして法然様からちゃんと虎の巻をいただいたのでございます。それをちゃんと暗記して、幕府の裁判所に出頭して申し開いたので、疑いが即座に晴れたというのでございます。このところでは、津戸が丸暗記したという、法然様代作の原文がそのままの形で載っているのは良かったと思うのですが、そうっていないのは残念です。私は大体は、これは法然様の文章に近いものだろうと思うのですが、学者風にアレンジされているのです。

法然様という方は、まったく字が読めなくて、今日で言えば、幼稚園の児童程度の者に対して



は、その人が読み書きできるような文章で往生決定の念仏の心を語り、また文章にも書くことができた方なのです。そのようにして、みんなを自分が考えているところに引き寄せることのできたお方だったのでございます。そういう語り口、文体が周りの人たちを法然ファンにしていたのです。

法然上人様のやさしい念仏の説教が鎌倉幕府をも説得したということになります。まさに歴史的な代理説教であったことになります。

法然様が直に語るよりも、何もわからない人が法然様を語ったために、かえって法然様らしくなったということになるのでございます。こういう生き方こそは本当の教育の勝利を証するものになるだろうと思います。法然様はそうい

う点でも、最高の教師と言えるお方だろうと思っ
っているのでございます。

武藏の国に猪俣党という武士集団がありました。その中の一人に甘糟太郎忠綱という武士が
おりました。無学不知は、この津戸や熊谷と同じ
でした。鎌倉幕府が成立いたしました直後の
建久三年というときに、比叡山の僧侶たちが乱
暴を起こして朝廷の言うことを聞かなかったた
めに、この甘糟もその鎮圧に動員されます。大
番役といいまして、当時、京都を守るための特別
な警護役に鎌倉の武士たちは当番を決めて、何
年か交代で京都の警護に当たっていたのでござ
います。彼もこの時、その大番役として京都警護
に当たっていましたので、叡山の山法師たちの

乱暴を防ぐために派遣されたのでございます。

こういうときには朝廷では、坊さんたちの乱暴は防ぐけれども、あまり手荒なことをすると、今度は比叡山は王城鎮護の錦の御旗をふりかざして逆ネズを食わせてくるので、山法師との戦争は大変難しかったのでございます。下手をすると、後でかえってそのために罰をこうむるとさえあったのでございます。そういう難しい役にこの甘糟太郎忠綱という人も当たったのでございます。彼は日ごろから法然様の教えを受けて、熱心なる念仏行者になっておりました。戦場に出かけるに当たって、法然様にいとまごいに来て、最後の念仏往生決定の心について、先生の法然様に、涙ながらにこういうふうにお尋ねしたというのでございます。

「今度、この戦場に出て立つことになる、山法師たちとの面倒な戦いになるので、自分は初めから戦死を覚悟して行く。戦死は一向かまわない。しかし、自分のように念仏を教わって熱心な念仏行者になっているものが、みすみす戦場に出て立って、人殺しをするなどということ、念仏行者としてこういう罪深いことはとてもできない。しかし、もしだからといって、自分が戦いをやめたならば、これは武士として卑怯の汚名をとることになる。ましてや、將軍家からは所領没収ということになる。そうすると子孫は路頭に迷うことになる。武士としては、このところは立派に戦って武名をあげなければ、武士であるところの本文に合わないことになる。この間にあつて、一体自分はこういうふうにし



たらしいものでしょうか」

皆さんや私のように、ある程度理屈をこねて
適当に言える人は、そういう時にはこういうふう
にすればいいだろうというふうに型通りに答
えを出すだろうと思います。しかし、ここはそ
のような常識論は通りません。真剣に念仏のあ
るべき信仰の心と、武士のあるべき武士道の火
花を散らす対決の場です。そこにこの愚直な、
一文不知の人たちのすばらしい真実があるので
ございます。武士道にこのバカまじめさがなく
なったならば、武士道は滅びるでしょう。これ
は武士としてはまことにもっともな、そして切
実な問いかけでございます。

これに対する法然様のお答えも、まことにす
ばらしいのでございます。さすが、みんなから

生き仏として渴仰されたゆえんもここにありま
す。法然様の立派な言葉を、私が記憶で申すの
ですから、あまりいい言葉にならないのですが、
こんな趣旨に法然様は答えております。

「一体、念仏というのは、何の仕事をしている
ということにかかわりがない。頭がいいとか悪
いとか、そういうことにも関係はない。善悪、
それさえも選ばない。武士であるならば、戦い
ながらも念仏を唱えることで、往生は決定する
のだ」。そういうふうに教えられました。

甘槽は豁然として大悟しました。「それでわか
りました」。喜び勇んで出陣したというのです。
そして、戦場で勇ましく戦い、最後、念仏を唱
えながら往生したということでございます。

（東北大学名誉教授・盛岡大学学長）

胎内教育・家庭教育

法然上人のご生涯に学ぶ

藤堂俊章



法然上人は長承二年（一一三三）四月七日の正午頃に美作国久米の南庄にある稲岡といいますから、今の岡山県久米郡久米南町里方でお生まれになりました。

父上は時国といつて、そのご先祖は仁明天皇（即位八三三）の息子である西三条の右大臣源光公に始まりますから、血統のいい家系であり、時国は久米の押領使といつて、国に奸盜等の人ある時に平らげ治める職——警察署長のような役人でありました。

母上は秦氏と申して、そのご先祖は応神天皇（即位二七〇）の十五年に今の中国——支那から日本に來た渡來人で、蚕を養つて機織を勤め帛綿を作り、人の膚を暖かにしましたから膚と秦と日本語の読み方が近いから、秦氏となった、豪族の娘であります。

ところが時国と秦氏との間にお子様がお生まれなかつたので、これを嘆かれて夫婦心を一にして、いい子が授かりますようにと、仏さまや神さまにお祈りをされました。

ご生誕の館から巽（南東）約六キロ位の所にある救世觀音が主尊像の岩間の觀音さまに三十七日、日參されたと伝えられています。

そして、秦氏が剃刀を飲む夢をみて懷妊されたということとは、剃刀は落髮授戒の時の用器でありますから、天下の戒師を生ずべき相といわれ、この子供が成長して出家学道し、仏法の棟梁となりもろもろの衆生を教化し遁世出家せしめて、仏道に引き入れるべき瑞相であると伝記は記しています。

その妊娠中、秦氏は心が柔和で身に苦痛がなかつたといえますから、オレガ・オレガの我執

のかたくなな心がなくなつて、オカゲ・オカゲの柔和な心になりましたから、したがつて、身体に苦痛がなくなつたわけでありましょう。

その原因はかたく酒や肉や五辛（韭・薤・葱・蒜・葫）を断つて、仏法僧の三宝に帰依する心が深かつたといひます。私はここから胎内教育の重要性を学ばなければならんと存じます。

米国のカーネギー研究所のジョージ・ワシントン・コーナー博士は、私たちが最初お母さんの胎内に宿つた時の体重は一グラムの千万分の十五で、それから二百八十日胎内において生まれ出た時の体重は七ポンド—三千グラム少々—で、その赤ん坊が二十年たつて一人前になつた時の体重を六十キロとしますと、赤ん坊は胎内わずか二百八十日の間に体重が二十億倍も増えますのに、生まれてから二十年という長い年月

と莫大な費用と親の並々ならぬ苦勞を投じて、僅か二十倍しか体重が増えないという、この数字をもつていかにお腹の中間が大切かを物語つておると存じます。

英国の詩人コレリッジは、「人間生まれる前、二百八十日間の歴史は、生まれてから後においておこるいかなる出来事よりも、なお一層重要な出来事をよく玉ならん」と申していますのは、やはり胎内教育の重要性を申しておると思います。

古来仏教では妊産婦に三帰を授けるといふ儀式作法が行なわれていまして、私の大本山善導寺では九州の遠近各地から安産祈願に來られます。これは大本山善導寺の開山浄土宗の第二祖鎮西聖光上人がご誕生後間もなしに母上が亡くなられていまして、そういうところから生む母親も、生まれる赤ん坊も無事でありますように

との心から始まったものでありまして、日曜祭日ともなりまして、出産間もない赤ちゃんを連れて、若いカップルが多勢お参りくださって、はなやいだ見事な風光となるのであります。

妊娠された奥様方は、是非菩提寺で三帰（仏法僧の三宝に帰依する）を授かり、毎朝食事前に仏壇の前に坐ってお念仏を申され、毎晩就寝前には仏壇の前に坐ってお経を誦読されたり、仏教聖歌を歌ったり、詠唱を唱えたり、月に最低一回は菩提寺に参ってご本尊を礼拝したり、年に一度は本山に参っていただき、身を慎しみ、口を慎しみ、意を慎しんで、生まれ出ずる子供が立派な人格の持ち主となり、世界の平和に貢献できるようなとお祈りをしていただきたいと思いますのであります。

名古屋大学の医学部の先生が中心になって書

かれた『胎教の智慧』という書物には、親が子供をたくましく育てるためには、赤ちゃんが生まれてからの「育児」よりも、(一)赤ちゃんが生まれる前に親が立派に育児のできる親としての素質を充実すること（人間形成）と、(二)胎児に対する妊娠の影響（広い意味の胎教）が大切であることが、科学的によく説明されています。

今から八十年ほど前に亡くなりましたが、現代の釈尊と仰がれた山崎辨栄上人は、あるご婦人の「子供の教育は何歳ごろから始めたらよろしゅうございますか」という質問に、「お宅のお子さんはお幾つですか」と尋ねられ、「六歳です」という答に「もう七年手遅れですね」とおっしゃったそうであります。

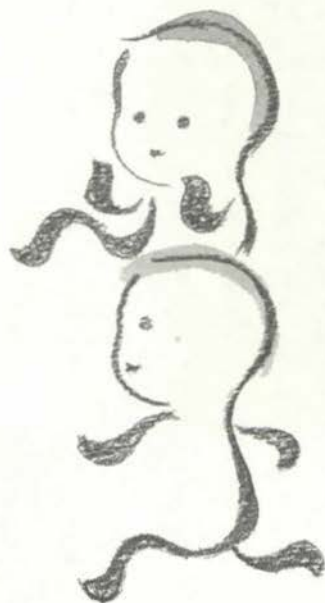
六歳の子供に七年手遅れということは、お腹の中に宿る前の一ヶ年が大切だということを教

えられていると私は思います。だから私は胎内教育ということは、お腹の中に赤ちゃんが宿つてからでは遅いんで、宿る前が大切だと思います。

あの有名な『ファースト』を書きましたゲーテが、「第一ボタンをかけそこなうと、最後のボタンをかけることができない」と申しておりま

す。私は戦争中しばらく軍隊生活をいたしました。た。初年兵といって初めての兵隊さんが入隊してきますと、慣れない軍隊生活で体が疲れて、朝、起床ラッパが鳴りますと、飛び起きズボンをはいて上衣に腕を通し、ボタンをかけながら中隊の建物の前に出て、一列横隊に並び、各班ごとに番号をつけて点呼をとります。

それを寝ぼけ面でやりますから、第一ボタンを第二の穴にかけ、第二ボタンを第三の穴にか



け、以下ずっと間違っかけてますから、「氣をつけ」と姿勢を正した頃には上の穴と下のボタンが残っている。

このように第一ボタンをかけそこなうと、最後のボタンをかけることができないということは、人生の第一ボタンは胎内教育であり、第二ボタンは家庭教育であり、第三ボタンは学校教育であり、第四ボタンは社会教育であると私は

思っています。

その人生の第一ボタンにあたる胎内教育が一つ誤ると、生まれてから後の第二・第三・第四ボタンとしての家庭・学校・社会教育の上に大きな狂いが生じてき、人格完成をめざす教育ができないということを、このゲーテの言葉は雄弁に物語っているのではないでしょう。

立派な陶器ができるためには、先ず土を選ば



なければなりません、その土を選ぶことが胎内教育であり、その陶器の型をつくるのが家庭教育であり、模様や色彩を施すのが学校教育であり、窯に入れて焼くのが社会教育ではなからうかと思うのであります。その土を選ぶという胎内教育が、今まで大変おろそかであつたのではないでしようか。

幼名勢至丸と名づけられた法然上人は、竹馬に鞭をあぐるよわいと申しますから、幼稚園保育園へ通う年頃、五・六・七歳の幼童の頃から、生れつき賢く成人のような振舞いがあり、どうかすると西の壁に向かつて坐る癖があつたと伝えられています。そのことは天台大師が臥しては合掌し、坐すれば必ず面を西になさつたのと軌を一にするものでありましょう。

そして、ものを言いかけた初めから、また、

口ずさみにも南無阿弥陀仏と唱えられましたから、親しい者も親密でない者も、それを見た者は皆、不思議だとあやしまない者はなかつたと申します。

幼少の頃から西の方に向かつて坐る癖があり、また南無阿弥陀仏とお唱えになつたということから、私は家庭教育を学びたいと存じます。家庭教育ということとは、親が子供を教育することではなくして、親の生活のすべてを真似さすのが家庭教育ではないでしようか。子供ほど親の真似を上手にいたす名俳優はございません。

「かくばかり親の日頃のあるまを、みごと演ずる名優わが子よ」であります。子供は親の言う通りにはしないが、する通りにするという恐ろしい言葉がございます。法然上人の父上と母上は夕陽の傾くさまをごらんになつては、西方

極樂の阿弥陀さまを敬い、口で南無阿弥陀仏と唱えられた、そういう親の日常生活を幼い勢至丸は真似されたと存じます。

「教え」というのは「上の行なうところを下をして倣わしむる」ことですが、私は「愛しむ」に通じていると思います。愛しむとはどういうことか。この子供は仏さまから授かった子である。われわれ夫婦はこの子供を仏さまから授かったのである。お預りしておるのである。仏さまのような立派な子供に育てあげなければならんという愛、そういう愛。育はそだつ、副^そえ立つ、副^そに立っていることと思います。そういうことをもって子供の副^そに立っていることが、私は教育だといいたいのであります。

そうしたならば、親自身が身体の上で、口の上で、心の上で、本当に立派な親になろうと努

力いたします。そういう心構えと努力があらますと、英語を教えなくても、算数を教えなくても、私は立派な家庭教育だと思うのであります。

昔の中国、晋に謝安という名宰相がいました。その奥様が子供の教育に熱心でしたが、主人が一向子供の教育をしてくれないことを不満に思いまして、あなたは一国の宰相として忙しいでしようが、たまには子供の教育を見てくださつたらと、一矢を放ちましたところ、謝安は平然として、私は始終教えていると答えたそうであります。謝安は自分の全生活——身と口と意のすべてを子供から真似られても大丈夫という自信があつたのだと思います。

「目に見せて耳に聞かせてしてみせて、ほめてやらねば、子は育たんよ」と歌われた方がいらつしやいますが、「学ぶ」という言葉は「まね

ぶ」という言葉からきたものであると聞いています。自分の周囲、ことに両親の全生活を真似してゆく、その積み重ねが家庭教育ではないでしょうか。

しかし、子供に見せんがための親の生活になつてはならないと思います。子供に全生活を真似られても大丈夫な親になるように、親が努力

することが大切でありましょう。今こそ政治家が、教育家が、宗教家が、実業家が、すべての人々が青少年に対して衿を正さなければならぬ時代だと思っています。お金をたくさん集めることの上手なのが、政治家の大物であつてはなりません。

人間の価値はお金で決まるのではなく、人物



によって決まるものと信じます。本当に人格

の高潔な清く正しく平和な暮らしをして、社会に奉仕するのが、一番尊い人間であるという新にして真、真にして深なる価値観・人間像を、今の親は子供に植えつけていかねばならんと存じます。そのためには、親がそういう生き方、生活をするということが、先決問題ではないでしょうか。

山崎辨栄上人に「育児の歌」がごさいます。

一、仰ぐも畏こきミオヤより

預かりにける稚児なれば

み旨のふうになれかしと

ただ朝夕に祈るなり

二、神聖正義のミオヤより

預かりにけるこの稚児を

もしもみ旨にたがわせば

我こそ地獄の薪なれ

夫婦は子供を仏さまからお預かり申し上げているのであります。だから自分たち夫婦の好みに育ててはいけないので、お預かり申し上げている仏さまのみ旨になつた、仏さまのみ心になつた子供に育て上げなければならぬという、朝夕の祈りこそ、家庭教育の中核であると存じます。

仏さまからお預かり申し上げているこの子供を、もしも仏さまのみ旨、み心にそむいた子供に育て上げたならば、親の私こそ地獄の薪とならなければならぬという、親の信仰、自覚こそ、家庭教育の前提でなければならぬと思います。そういう胎内教育、家庭教育ということを、法然上人のご生涯から学ばせていただいた次第であります。

(大本山善導寺法主)



編集

後記

●温泉街や名旅館、街並みや郷土料理の話を話題にする旅日記や紀行文は、書き手にしてみると素材には困らないし、読む側も軽いテンポですんなりと読んでいただけます。しかし、巻頭を飾っていたみたいです。紀行文はそうしたつづの紀行文ではありません。増上寺から知恩院までの行程を日付けて追っただけですが、網代笠の内の視線はひたすら数メートル先のコンクリートの道を追っただけで、両側にひらける温泉はもとより、その土地の味も関係ないし、何しろ食事はほとんどがコンビニエンスストアのそれなのです。そして、ただひたすらに念仏し、歩を進めるだけでありました。現代版「東海道膝栗毛」は法然上人の念仏行脚を、今日を生きたる青年僧達が生かした見事な紀行文だと思えます。宗門の明日を担う若い彼らに、どうぞ盛大な拍手をお願いいたします。

(村田洋一)

●仏教伝道に顕著な業績をあげてきた人々への賞として知られる第二十八回「仏教伝道文化賞」が詩人・榎本栄一氏と、私ども鑽仰会の会長である牧田諦亮師に贈られました。牧田師のご専門は中国中世、近世仏教史で、ことに疑経研究などで多くの学問的業績をあげられ、その疑経研究の一環である七寺古逸経研究会の会長もつとめておられます。昨年は交通事故のため三か月も入院されるという不慮の災難に遭われたりもしましたが、さいわい健康を回復されてお元気になりました。ご専門の研究分野はもとより、法然上人鑽仰運動の一層の興隆のためにも、

ますますのご活躍をお祈りしたいと思います。

●先月号から始まった高橋富雄氏の「念仏信仰と武士道」に、読者の反響が数多くありました。三月号「宗報」にも高橋氏の「世界語としての法然法語」が載っております。併せてご愛読のほどをおすすめ申し上げます。

●巻末に善導寺ご法主善堂台下の玉稿を掲載させていただきました。ご多忙の中のご執筆に、深甚な感謝の意を表します。ありがとうございました。

●この春の彼岸の東京地方は、比較的穏やかな日と恵まれた日は、比較的例年、地区にある多摩同朋会老人ホームに出かけて先亡物故者の追善法要をつとめておりますが、その折に話題となったのが、近頃、巷で流行しつつある散骨のことでした。ちなみにその老人ホームの理事長は、かつて福祉活動の功績で吉川英治賞を受賞され、一昨年は名誉都民にも選ばれた中城イマさんという八十八歳の女性です。埋骨が散骨かといった問題は、さまざまな事情で入園を余儀なくされている老人達にとっても重大な関心事であることを知らされました。

(編集チーフ・小川有順)

栗田順一
齋藤晃道
大室照道
細田芳光
太田正孝
長谷川岱潤
村田洋一
石上俊教

●お詫

一月号、十四頁上段七・八行の法然上人ご法語に誤植がありました。学問にはじめてみたつるは、きはめて大事なり。師の説を伝言はやすきことなり」と訂正し、藤堂泰俊台下に遷りてお詫びいたします。

●訂正
二月号藤本雅清氏「死の臨床研究会会長」を「臨死問題研究会会長」に訂正いたします。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受け付けております。ただし、採否に関しては編集部にて一任ください。また、原稿は原則として返却いたしませんので、必要の方は必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていただいた分は規定の稿料を過呈いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありましたら、ご遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部

浄土

六十巻 四月号 頒価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成六年三月二十五日
発行 平成六年四月一日

編集人 宮林昭彦
発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社文化カラー印刷
写真植字 文化フォントタイプ

〒一〇五 東京都港区公園四七四明照会館内
発行所 法然上人鑽仰会
電話 〇三三五七八六九四七



SAPPORO

私たちは味わい・ライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリーハーフ〉



サッポロ生ビール カロリーハーフ

飲酒は20歳を過ぎてから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を譲り渡した最大の基準は、その姿とかがちである。
つくり手の強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿が美しい。かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO:セドリックV30ツインカムターボ プロラム

主な装備 ● V6 30DET (V6 ツインカムターボ・総排気量2960cc) エンジン ● 最高出力255PS/6000rpm (※NET値) ● 最大トルク35.0kgm/3200rpm ● フルレンジ電子制御4速オートマチック(E・AT) (※NET値) とは、エンジンを車両に搭載した状態とほぼ同等条件下で測定したものです。日産自動車株式会社お客様相談室 ● 全国共通フリーダイヤル0120-315-232お近くのローレル販売会社へ。